

東大・東北大現代文課外実施しました その3

先に紹介しました大田和先生の磐城高校国語科大学入試問題と解答作成解説のための資料は、実に 848 問分ストックされており、国語科の教員はそれを自由に参考にできることになっております。今回の東京大学及び東北大学課外においても、参考資料として生徒たちに配付しました。2005 年入試から 2017 年入試までの資料であります。実に 13 年間の知の結集がそこにあるのです。

今、2 年生担任の小松先生が高校時代に、大田和先生が本校に着任いたしました。すぐに、私の学年で仕事を共にしていただくことになり、授業の予習プリントや中間期末等の定期試験問題とその解説解答、実力テストの作問とその解説解答などのテキスト作りを一緒にさせていただき、まさに区恩師とともに学年の授業を共にすることとなって汗顔の至りでありました。

山崎憲一先生や、星野保暢先生とともに、忘れがたい 3 年間を送るその上に、同じ学年を指導する良い機会に恵まれ、国語教員みょうりに尽きるものがありました。

2017 年東京大学評論の問題は、科学技術と人間の生の変容に関しての「伊藤徹」の評論の問題です。この筆者は、2004 年にも出題されており、21 世紀になって科学技術と人間の生の軋轢の問題、近代を支える人間を核にしている様々な考え方の問題等は、大学においても必然的な課題意識であり、その中でも、「できること」と「すべきこと」の価値判断の中で揺れる科学技術の問題は大きな課題としているところです。

ご存知のように、2011 年の東日本大震災と原子力発電所事故のもたらした大きな危機は、この科学と人類がもともと課題としてはらんでいた問題が一気に外側に放出されたものとしてとらえられると思います。現在でも、トリチウムを含む水を海に放出できない問題とか、風評被害の問題とかやがてだんだんと明らかになるであろう様々な健康被害の問題であるとか、真実を探るなかで、「できること」と「すべきこと」の大きな価値判断の割れ目は、これからもずっと大きな課題として付き合っていかなければならないことであるのは間違いのないことです。

空が澄んできました。風が乾いてきたのを実感します。街を朝から歩き、うろこ雲が羊の群れのように並ぶ様子を見ていると、この国の自然の営みの永年の間変わることのない循環を確認できます。

雨の日には雨のありようが間違いなく日本の雨であることも心の支えとなっております。同じように、空気の流れや虫の音や教室のにおいが今も高月の学びを支えます。

先達はあらまほしきことかなと兼好法師が言ったことは間違いなく、次の先達を見つけることも大きな使命とっております。

